

張伯英『法帖提要』訓注稿（9）

澤田雅弘、池田絵理香、齋藤 堯
小西優輝、海老隆成、李 松樺

大学院書道学専攻博士課程前期課程の開設授業「中国書学演習」（澤田担当）のテキストとした張伯英『法帖提要』（筆写原稿、『統修四庫全書総目提要』所収）の内 19 項目を訓読し注を付したものである。原稿は、受講者それぞれが担当項目を整え、注を付したが、訓読については澤田が点検した。執筆者名は、各項末の（ ）内に記した。なお、原稿の取りまとめには、齋藤が当たった。（澤田）

【No.188】御筆懐旧詩四卷¹ 清内府本

清高宗御書。乾隆己亥刻。題云。山莊多暇。既書七十二候詩冊²。復以今春所作懐旧詩二十三首。亦分冊書之。浹旬而竟。第一冊三先生三首曰。福龍翰。朱可亭。蔡聞之。五閣臣五首。曰故大学士鄂爾泰。故大学士張廷玉。故大学士一等忠勇公傅恒。故大学士來保。故大学士劉統勳。第二冊五功臣五首。曰故協弁大学士一等武毅謀勇公兆惠。故戸部尚書一等果毅公阿里袞。故雲貴總督將軍一等誠嘉毅勇公明瑞。故大学士舒赫德。故四川提督三等威信公岳鍾琪。第三冊五詞臣五首曰。故大学士梁詩正。故刑部尚書張照。故吏部尚書汪由敦。故刑部尚書銜原刑部侍郎沈德潛。第四冊五督臣五首。曰故大学士陝甘總督三等忠勤伯黃廷桂。故大学士前兩江總督尹繼善。故大学士兼江南河道總督高斌。故直隸總督方觀承。故大学士兼兩江總督高晉。以上各詩。具載御製集³。此刻則高宗親書。非由詞臣代筆。清代諸帝皆善書法。高宗工力尤深。不煩繩削而自合法度。晚年益有古淡之致。詩於諸人評騭。或鄰苛刻。沈德潛。則直同詬詈⁴。豈懐旧之體。当如是耶。

清の高宗の御書。乾隆己亥(44年 1779)の刻。題して云う、「山莊暇多く、既に七十二候詩冊を書し、復た今春作る所の懐旧詩二十三首を以て、亦た冊を分けて之を書し、浹旬にして竟る。」と。第一冊は三先生の三首。曰く福龍翰、朱可亭、蔡聞之。五閣臣の五首。曰く故大学士鄂爾泰、故大学士張廷玉、故大学士一等忠勇公傅恒、故大学士來保、故大学士劉統勳。第二冊は五功臣の五首。曰く故協弁大学士一等武毅謀勇公兆惠、故戸部尚書一等果毅公阿里袞、故雲貴總督將軍一等誠嘉毅勇公明瑞、故大学士舒赫德、故四川提督三等威信公岳鍾琪。第三冊は五詞臣の五首。曰く故大学士梁詩正、故刑部尚書張照、故吏部尚書汪由敦、故刑部尚書銜原刑部侍郎沈德潛。第四冊は五督臣の五首。曰く故大学士陝甘總督三等忠勤伯黃廷桂、故大学士前兩江總督尹繼善、故大学士兼江南河道總督高斌、故直隸總督方觀承、故大学士兼兩江總督高晉。以上の各詩は、具さに御製集に載す。此の刻は則ち高宗の親書。詞臣の代筆に由るに非ず。清代の諸帝は皆な書法を善くす。高宗は工力尤も深く、繩削に煩わされずして自ら法度に合う。晚年益ます古淡の致有り。詩は諸人の評騭に於て、或いは苛刻に鄰し。沈德潛の若きは、則ち直ちに詬詈に同じ。豈に旧を懐うの體、当に是の如きなるべけんや。

[注]

- 1 御筆懐旧詩四卷：『石渠宝笈三編』延春閣藏六「高宗純皇帝御筆懐旧詩 四冊」（国立故宫博物院印行本では第3冊 1214～22頁）に「〔本幅〕画雲蟬牋本。摺装四冊。第一冊十九幅。第二冊十一幅。第三冊十二幅。第四冊十一幅。皆縦八寸二分。横八寸。」と見えるもの。「御筆行書」で、末には「今秋山莊多暇、既書七十二候詩。及春間所作懐旧詩。茲復録一過。亦浹旬而竟。己亥仲冬。御筆。」とある。冊内には宝印「筆端造化」「脩辭立誠」「成性存存」「用筆在心」「几席有余香」「虛衷澄照」「進德修業」「乾隆」「寧寿宮」「五福五代堂古稀天子宝」「古稀天子」「八徵耄念之宝」「太上皇帝之宝」を分鈐する。なお『石渠宝笈三編』避暑山莊藏三(第9冊 4287頁)にも収蔵されるが、こちらは「蟬箋本」で縦が三分長い「縦八寸五分」の摺装で、冊内の宝璽の数も少ない。
- 2 七十二候詩冊：七十二候詩は『御製詩集』四集卷57所収「月令七十二候詩」。七十二候は、5日を1候とする季節区分。すなわち1月ごとに6候の計72候。正月立春節三候の「東風解凍」「蟄虫始振」「魚陟負水」3詩以下、十二月大

寒中三侯の「鶏乳」「征鳥厲疾」「水澤腹堅」3詩に至る72詩。その詩冊は『石渠宝笈』に見えない。

3 具載御製集：『御製詩』四集卷58・59所収「懷旧詩」に福龍翰以下の各詩を載せる。

4 沈徳潜。則直同話晋：「東南稱二老、曰錢沈則繼。並以受恩眷、佳話芸林誌。而實有優劣、沈躋錢為粹。錢已見前詠、茲特言沈事。其選國朝詩、說項乖大義。制序正闕失、然亦無訶厲。仍予飾終恩、原無責備意。昨秋徐案發、潜乃為伝記。忘國庇逆臣、其罪實不細。用是追前恩、削奪從公議。彼豈魏徵比、仆碑復何日叶。蓋因毫而荒、未免因小利。設曰有心為、吾知其未必叶。其子非己出、執袴甘糜棄。孫至十四人執、而皆無書味。天網有明報、地下宥深媿。可惜徒工詩、行闕信何濟。」のとおり、罵詈に終始する。また、自注にも累々と誹謗する。

(澤田雅弘)

【No.189】南韻齋帖四卷 榮邸自刻本

清榮郡王綿億書。億為榮純親王永琪之子。諡曰恪。琪高宗之第五子。億則高宗第三孫也。嘉慶時刻此帖。不分卷次。書七種。和御製詩。臨米帖。孝經古本。臨趙文敏蘭亭。楷書千文。楷書小園賦。杜工部題画詩。每種皆有袁治摹勒小印¹。綿億書名不甚著。小楷妍潤。略似詒晋齋²。大書則未善。所写杜詩無甚氣力。轉折尤形薄怯。凡專學趙書者。往往有此弊。其臨米書一帖頗肖。字少易摹耳。高宗諸王。多擅書画³。生承平之時。席尊崇之位。有富厚之力。無所事事。得以怡情筆墨。成邸最傑出。與一時書家相旗鼓。其諸孫亦受薰陶。觀摹而善⁴。億書具有楷則。資力少遜。專趨勻円。勻円但宜於小字。若無骨力而為展拓。便成俗状。此帖惟堪存諸家塾以示子孫。非能與詒晋齋之書。共馳聘芸院中也。顧其摹搨之精。猶想見太平盛時。技術優美。不草率從事。閱此不禁世運升降之感云。

清の榮郡王綿億(1764~1815)の書。億は榮純親王永琪(1741~66)の子為り。諡して恪と曰う。琪は高宗の第五子。億は則ち高宗の第三孫なり。嘉慶の時此の帖を刻す。卷次を分けず。書は七種。御製に和するの詩。臨米帖。孝經古本。臨趙文敏(孟頫)の蘭亭。楷書千文。楷書小園賦。杜工部(甫)の題画詩。每種皆な袁治摹勒の小印有り。綿億は書名甚だしくは著われず。小楷は妍潤。略ぼ詒晋齋に似る。大書は則ち未だ善からず。写す所の杜詩は甚だしくは氣力無し。轉折は尤も薄怯を形わす。凡そ専ら趙書を学ぶ者は、往往にして此の弊有り。其の臨米書の一帖は頗る肖るも、字少や摹し易きのみ。高宗の諸王は、多く書画を擅にす。承平の時に生まれ、尊崇の位に席し、富厚の力有り、事を事とする所無し。以て情を筆墨に怡ばすを得。成邸(永理)は最も傑出し、一時の書家と相旗鼓す。其の諸孫も亦た薰陶を受け、觀摹して善くす。億の書は具さに楷則有るも、資力は少や遜り、専ら勻円に趨く。勻円は但だ小字に宜しきのみ。若し骨力無くして展拓を為さば、便ち俗状を成す。此の帖は惟だ諸の家塾に存して以て子孫に示すに堪うるのみ。能く詒晋齋の書と、共に芸院の中に馳聘するに非ざるなり。其の摹搨の精しきを顧みれば、猶お太平の盛時を想見す。技術は優美、草率に従事せず。此を閱すれば世運の升降の感を禁ぜずと云う。

[注]

- 1 袁治摹勒小印：袁治はNo.204 詒晋齋摹古帖10卷(嘉慶10年1805)に「袁治鉤摹頗稱精善」という。また「詒晋齋巾箱帖16卷」中の後3種、すなわち嘉慶16年増刻の集錦帖4卷、17年増刻の藏帖4卷および藏真帖4卷も袁治の摹。なお程章燦氏の『石刻刻工研究』には袁治の所刻石刻として、何双溪繼室梁氏家伝(乾隆55年1790)、中州東館碑(同56年)、閔聖帝君覺世真經(同59年)、塑楊繼盛像紀事碑(嘉慶2年1797)、文昌帝君陰騭文(同8年)を挙げる。うち何双溪繼室梁氏家伝には「吳郡袁治」、中州東館碑には「刑部律例館供事(奉?)袁治」、塑楊繼盛像紀事碑には「元和袁治」と署する。
- 2 詒晋齋：乾隆帝第11子、永理(1752~1823)の号。成哲親王。
- 3 高宗諸王多擅書画：例えば、李放『皇清書史』には第4子履端親王永瑛、第5子榮純親王永琪、第6子質莊親王永瑤、第8子儀慎親王永璇、第11子成哲親王永理を挙げ、李放『八旗画録』には永瑛・永瑤・永璇・永理を挙げる。
- 4 諸孫亦受薰陶觀摹而善：例えば、仁宗の第5子綿愉は「尤精鑑別金石、所藏名跡至富、其自作書亦甚工。」(『皇清書史』引『木葉廐法書記])と見え、また綿億についても「精八法、姿媚遒勁、綽有晋人風度。嘗自製松烟墨、遠勝芸粟

齋、函璞齋諸家。」(同上)と伝えられる。

(澤田雅弘)

【No.190】

慕義堂梁帖¹八卷 句容馮氏本

清馮宜瑜²彙刻梁同書³書。梁氏之帖。有嘉興吳氏之青霞館⁴。濮院陳氏之瓣香樓⁵。風涇張氏之娛志居⁶。並此而四。嘉慶丁丑刻成。其中多晚年書。有九十一歲之作。猶復筆筆謹嚴。無頹唐習氣。可見此老精力過人。其論書以平直中正為宗。故於王覺斯之擬山園帖。深所不取⁷。謂姜何汪查陳諸家。各有至佳之處。然多宜於小字。不宜於大字⁸。此評甚當。帖中所收。惟千字文一種。為徑寸真書。視其他小字及行草。則未能動合自然。古人銘石之書。簡牘之書。為體各異。唐後乃混為一。至宋而後。大書碑碣。東坡松雪之外。鮮可觀者。蓋以簡牘之法。施之大楷。必有氣力不充實。以及偏斜單弱之患。近代工書碑者。惟張裕釗廉卿。深於北體。所詣突過前人。非惟山舟之大書。不能逮也。其付從孫眉子書云⁹。書之妍醜。不盡關乎學問。而情性之淺深因之。平日能疏淪其性靈。復以書卷浸灌之。不思其不工。世未有學問淹通。性情敦厚。而書乃庸俗者。誠扼要之論矣。籤題慕義堂梁帖。冊首題頻羅庵法書。命名不一致。是亦小疵。其分書皆錢梅溪筆也。

清の馮宜瑜 梁同書の書を彙刻す。梁氏の帖は嘉興の吳氏の青霞館、濮院の陳氏の瓣香樓、風涇の張氏の娛志居 有り。此を並〔あわ〕せて四あり。嘉慶丁丑(22年 1817)刻成る。其の中は晩年の書多し、九十一歳の作有り、猶お復た筆筆謹嚴にして、頹唐の習氣無し。此の老の精力 人に過ぐるを見るべし。其の論書は平直中正を以て宗と為す、故に王覺斯(鐸 1592~1652)の擬山園帖に於て、深く取らざる所なり。謂う、「姜(宸英 1628~99)、何(焯 1661~1722)、汪(士鋹 1658~1723)、查(昇 1650~1707)、陳(奕禧 1648~1709)の諸家は、各おの至佳の処有り、然れども多く小字に宜しく、大字に宜しからず。」と。此の評 甚だ當る。帖中 収むる所は惟だ千字文の一種のみ、徑寸の真書と為す、其の他の小字及び行草に視ぶれば、則ち未だ動れば自然に合する能わず。古人は銘石の書、簡牘の書、体を為すこと各おの異なる。唐後は乃ち混せて一と為し、宋に至りて後は、碑碣を大書するも東坡(蘇軾)松雪(趙孟頫)の外は観るべき者鮮し。蓋し簡牘の法を以て、之を大楷に施せば、必ず氣力充實せざる有りて以て偏斜單弱の患に及ぶ。近代の書碑に工なる者は、惟だ張裕釗廉卿(1823~94)のみ、北体に深く、詣る所 前人に突過す。惟だに山舟の大書、速ぶ能わざるのみに非ざるなり。其の從孫の眉子に付する書に云う、「書の妍醜は、尽くは學問に關わらざるも、而るに情性の淺深は之に因る、平日能く其の性靈を疏淪し、復た書卷を以て之を浸灌すれば、其の工ならざるを患えず。」と。世未だ學問淹通し、性情敦厚にして、書乃ち庸俗なる者有らず、誠に扼要の論。籤には慕義堂梁帖と題し、冊首には頻羅庵法書と題し、命名一致せず。是れは亦た小疵。其の分書は皆な錢梅溪(泳 1759~1844)の筆なり。

〔注〕

- 1 慕義堂梁帖：『頻羅庵法書』ともいう。『叢帖目3』頻羅庵法書8卷参照。No.206 甌香館法帖4卷、No.219 明清名人尺牘10巻にも見える。
- 2 馮宜瑜：生歿年不詳。字は鳴和。No.206 甌香館法帖4巻、No.219 明清名人尺牘10巻にも見える。
- 3 梁同書：1723~1815。字は元穎、山舟は号。浙江省錢塘の人。乾隆17年(1752)の進士で翰林院侍講となった。許宗彦『鑑止水齋集』巻17に「公書初顔柳、中年用米法。七十後愈臻變化、純任自然。本朝能書人鮮有長於大字者。公作字愈大、結構愈嚴。」とあるほか、『昭代名人尺牘小伝』には「山舟書出入顔柳米董、自立一家。負盛名六十年、所書碑版遍寰宇。与劉石庵王夢樓並称劉梁王。」とある。著に『頻羅庵論書』『筆史』がある。
- 4 嘉興吳氏之青霞館：嘉慶20年(1815)、吳修撰集、馮瑜摹勒による梁同書の專帖。『叢帖目3』青霞館梁帖6巻参照。張伯英『説帖』（『統修四庫提要』第18巻315頁）昭代名人尺牘24巻にも見える。
- 5 濮院陳氏之瓣香樓：嘉慶23年、陳銑(1785~1859、字は蓮汀。浙江省秀水の人)による梁同書の專帖。陳銑は蔣宝齡『墨林今話』巻15に「少即游山舟學士之門、親受秘訣。往還尤密、故所詣入神。」とある。
- 6 風涇張氏之娛志居：不詳。

7 其論書以平直中正為宗故於王覺斯之擬山園帖深所不取：『頻羅庵論書』『答陳蓮汀論書』に「擬山園帖、本不足取。至扁聯闌入古文鐘鼎、則大謬矣。皆好怪者變相。亦所謂以艱深文淺陋。書體祇有平直中正。自古無他道。」とある。擬山園帖は『叢帖目3』擬山園帖10卷参照。

8 謂姜何汪查陳諸家各有至佳之妙然多宜於小字不宜於大字：前掲書には「本朝書家。姜何汪查陳各有至佳妙。大率多宜於小字而不宜於大字。」とあり文字に若干の異同がある。

9 付從孫眉子書云：梁祖恩（生歿年不詳）。眉子は字。号は久竹。張廷濟『桂馨堂集』『順安詩草』に「梁眉子同年祖恩」とある。梁同書の『頻羅庵遺集』卷11題跋二「為從孫祖恩寫論書冊」に「書之為道小道也。其妍醜不盡闕乎學問。而性情之淺深因之。吾家自曾祖下皆善書、其性情深也。爾輩平日但疏淪其性靈、而復以書卷浸灌之、不患其不工。前之所論抑猶是紙上陳言也。嘉慶五年歲在庚申二月望後、書付從孫眉子。過此以往、日益衰眊。恐不復再能塗抹矣。」とある。

(池田繪理香)

【No. 191】

晚香堂蘇帖十二卷 旌德姚氏本

清姚学経¹輯。学経有因宜堂帖。唐宋八家帖。白雲居米帖。並此為四種也。陳眉公晚香堂蘇帖二十八卷²。乃近代著名之刻。姚襲其名。而內容各異。帖肆呼為小晚香堂。以別於陳氏之帖。其前四卷帖尾。皆有崇禎某年月刻石。学経謂其曾祖繼縉。得楊氏所藏旧版。而形式与後數卷無異。選帖之謬相同。蓋同為雍正間刻。崇禎年款不可信也。卷一至四。為花蕊夫人宮詞。春帖子詞。煙江疊嶂圖詩。過南華寺詩。妙高台詩。書李世南³画秋景詩。歸去來辭。集歸去來辭詩。集歸去來辭歌。黃州寒食詩。題画。養生論。卷五至八。曰滕王閣序。画記。七絶詩。与畢君⁴札。卷九至十二。曰南華經。清言。前後怪石供。乞居常州奏。海市詩。次韻送梅詩。跋淵明詩。帖中惟煙江疊嶂圖詩。題伯時画。与畢君札。次韻送梅詩四種為蘇書。大書七絶。為集蘇書。其他殆無東坡一字。雖習見之帖。如黃州寒食詩。養生論。海市詩等。皆棄原本不取。而用不知何人臨仿之書。妄稱東坡。良不可解。至花蕊詞。滕王閣序。怪石供。淵明詩跋。尤屬毫無影響。奈何以此為蘇書哉。帖首五篆字。即摹陳眉公本。是其有意影射。旧版云云。純為虚語。以惡刻冒充名帖。学者每為所欺。不可不詳弁之矣。

清の姚学経の輯。学経には因宜堂帖、唐宋八家帖、白雲居米帖有り、此れを並せて四種と為すなり。陳眉公(繼壽：1558～1639)の晚香堂蘇帖二十八卷は、乃ち近代著名の刻なり、姚其の名を襲うも、而れども内容は各おの異なり、帖肆呼びて小晚香堂と為し、以て陳氏の帖に別つ。其の前四卷の帖尾には、皆な崇禎某年月刻の石有り。学経其の曾祖繼縉、楊氏所藏の旧版を得と謂う。而るに形式は後の數卷と異なる無く、選帖の謬りは相同じ。蓋し同に雍正の間の刻と為す。崇禎の年款は信ずべからざるなり。卷一より四に至るまでは、花蕊夫人宮詞、春帖子詞、煙江疊嶂圖詩、過南華寺詩、妙高台詩、書李世南画秋景詩、歸去來辭、集歸去來辭詩、集歸去來辭歌、黃州寒食詩、題画、養生論と為す。卷五より八に至るまでは、曰く滕王閣序、画記、七絶詩、与畢君札と。卷九より十二に至るまでは、曰く南華經、清言、前後怪石供、乞居常州奏、海市詩、次韻送梅詩、跋淵明詩と。帖中惟だ煙江疊嶂圖詩、題伯時(李公麟：1049～1106)画、与畢君札、次韻送梅詩の四種のみ蘇書と為し、大書の七絶は、蘇書を集むと為す。其の他は殆ど東坡(蘇軾)の一字無し。習見の帖と雖も、黃州寒食詩、養生論、海市詩等の如きは、皆な原本を棄てて取らず、而して何人の臨仿なるかを知らざるの書を用い、妄りに東坡と稱す、良に解すべからず。花蕊詞、滕王閣序、怪石供、淵明詩跋に至りては、尤も毫も影響無きに属す。奈何ぞ此れを以て蘇書と為さんや。帖首の五篆字は、即ち陳眉公の本を摹す。是れ其れ影射するに意有り。旧版云云とは、純ら虚語と為す。惡刻を以て冒して名帖に充つ、学ぶ者毎に欺く所と為る。詳しく之を弁ぜざるべからず。

[注]

1 姚学経：生歿年不詳。字は東樵。旌德(安徽省旌德県)の人。錢泳(1759～1844)『履園叢話』卷9「碑帖」中の「偽法帖」に「嘉慶初年、有旌德姚東樵者。目不識丁、而開清華齋法帖店。輒摘取旧碑帖、假作宋元明人題跋、半石半木、彙集而成、其名曰因宜堂法帖八卷、唐宋八大家帖八卷、晚香堂十卷、白雲居米帖十卷。皆偽造年月姓名、折來折去、充旧法帖。遍行海内、且有行日本、琉球者。尤可嗤鄙。」とある。

- 2 晚香堂蘇帖二十八卷：陳繼儒の集刻した蘇軾の專帖。万曆44年(1616)刻。李日華(1565～1635)『味水軒日記』卷8、万曆44年9月に「二十四日、陳眉公先生来、以所刻晚香堂蘇帖相示。」とある。
- 3 李世南：生歿年不詳。字は唐臣。安肅(河北省徐水区)の人。晁補之(1053～1110)と同試の諸生。
- 4 畢君：畢仲舉。生歿年不詳。畢仲游(1047～1121)の弟。

(齋藤 堯)

【No.192】

話山草堂帖八卷 蕪縣沈氏本

清沈道寛¹書。其子敦蘭輯刻。道寛。字栗仲。官湖南知県。敦蘭。字彦徴。官藩司。属其幕客羅浚²摹勒上石。以一種為一卷。臨古者十七帖。瘞鶴銘。龍藏寺。坐位帖。松雪仇府君墓誌。自書者少陵秋興八首。秦中雜詩。張宛邱題中興頌詩。所臨鶴銘為全文。吳平齋雲³跋云。此銘自滄洲陳氏拽置山寺後。捶搨日多。僮父因其漫漶重加剔挖神韻失矣。栗仲先生拋旧刻全本撫寫。今水搨既不可見。見此臨本。足存老成典型。後款旧本皆作上皇山樵人。此作上皇山樵逸人。或別有所本。惜先生已作古人。未能請質也。夫此銘全文見於宋人記錄者。即不可信。玉煙堂⁴刻作上皇山樵人逸少書。竊以為逸少二字後人妄加。沈臨作逸人逸少。又因涉及後一字而誤。未加改正耳。石出水後所存爽塏二字。前人記載皆無。則所謂全文者豈非臆造耶。沈書円熟。其臨此銘。則未得筆法。原本以方勁取勢。專趨於円。未有不單弱者。臨龍藏寺所失亦同。惟臨松雪頗肖時代近也。所臨坐位帖為第一百八本。功力之深可知。自謂專學平原。而多用劉石庵法。敦蘭謂先大夫在湘。曾刻所書譜序魯公三表⁵坐位帖及縮臨坐位帖寄存長沙。兵燹後俱失。三表魯公偽迹沈氏乃不之弁。宜其學顔而弗能至。平齋諸跋。深致推挹。則重其郷先輩也。

清の沈道寛の書。其の子の敦蘭の輯刻。道寛は字は栗仲、官は湖南知県。敦蘭は字は彦徴、官は藩司。其の幕客羅浚に属して摹勒上石せしむ。一種を以て一卷と為す。臨古なる者は十七帖、瘞鶴銘、龍藏寺、坐位帖、松雪の仇府君墓誌、自書する者は少陵の秋興八首、秦中雜詩、張宛邱の題中興頌詩。臨する所の鶴銘は全文を為す、吳平齋雲の跋に云う、「此の銘は滄洲の陳氏拽て山寺に置きてより後、捶搨日び多く、僮父 其の漫漶に因りて重ねて剔挖を加え、神韻失わる。栗仲先生は旧刻の全本に拠りて撫寫す。今は水搨既に見るべからざるも、此の臨本を見れば老成の典型を存するに足る。後款は旧本は皆な上皇山樵人に作るも、此れは上皇山樵逸人に作る。或いは別に本づく所有るか。惜しむらくは先生已に古人となり、未だ質を請う能ざるなり。」と。夫れ此の銘の全文の宋人の記録に見ゆるものは、即ち信ずべからず。玉煙堂の刻は「上皇山樵人逸少書」に作る。竊かに以為えらく「逸少」二字は後人妄りに加うと。沈の臨は逸人に作る。逸少は又た後の一字に涉及して誤り、未だ改正を加えざるに因るのみ。石 水より出づる後に存する所の「爽塏」の二字は、前人の記載皆無し。即ち所謂全文は豈に臆造に非ずや。沈書は円熟、其の此の銘を臨するは則ち未だ筆法を得ず。原本は方勁を以て勢を取り、専ら円に趨くも、未だ単弱ならざる者有らず。臨龍藏寺の失う所も亦た同じ。惟だ臨松雪の書 頗る肖るは、時代近ければなり。臨する所の坐位帖は第一百八本と為す、功力の深きこと知るべし。自ら専ら平原を学ぶと謂うも、而れども多く劉石庵の書法を用う。敦蘭謂う「先大夫の湘に在りしとき、曾て臨するの所の書譜序、魯公の三表、坐位帖及び縮臨坐位帖を刻し、長沙に寄存するも、兵燹の後俱に失う。」と。三表は魯公の偽迹、沈氏乃ち之を弁せず、宜なるかな其の顔を学びて至る能ざる。平齋の諸跋 深く推挹を致すは、則ち其の郷の先輩を重んずればなり。

【注】

- 1 沈道寛：1772～1853。字は栗仲、浙江寧波の人、嘉慶25年(1820)の進士。山水画を善くした。
- 2 羅浚：生歿年不詳。字は朗秋、号は秋道人、湖南常德の人。篆刻に工みであった。
- 3 吳平齋雲：吳雲(1811～1983)。字は少甫、号は平齋、退樓、浙江省湖州の人、齋号は二百蘭亭齋。
- 4 玉煙堂帖：陳瓛が万曆40年(1612)に刻した集帖。漢魏より宋元に至る名跡を集刻する。
- 5 三表：謝兼御史大夫表、謝贈祖官表、讓亮部尚法表。

(小西優輝)

【No. 193】

式好堂藏帖¹四卷 蒲城張氏本

清張士範²輯明董其昌書。鐫者歙泉黃潤章³。每帖於標目之下。均有菡亭士範蒲城張氏二印⁴。第一卷樂志論十三行二種。皆有沈繹堂王夢樓題⁵。推挹甚至。繹堂謂唐人評褚書如瑤台嬋娟。文敏融化諸帖。歸於自然。用法而不為法囿。此四字當以移評。又謂松雪書勻靚為優。若豐神四映。巧妙天成。文敏獨擅。夢樓歎其所評允當。而曰香光全以神韻勝。集晉唐諸家之大成。余嘗以禪為論。晉人如來禪也。唐人菩薩禪也。宋人祖師禪也。香光兼而有之。其少遜唐宋。則時代所為。至於目擊道存。心手兩忘。恐唐宋諸家。未盡實証。無論元明矣。第二卷尺牘數通。第三卷少陵飲中八仙歌典論論文。第四卷大書七截五律各詩。臨楊少師新步虛詞。自題云。唐人書皆迴腕。轉折藏鋒。留得筆往。不直率流滑。余愧未能迴腕藏鋒。學書要訣至筆能留否。視學者之功力。香光尚以不流滑為難。可知其境未易造矣。此刻董書無多。未有贗筆。小楷摹勒尤善。視明刻各本。不啻過之。清代書家之尊崇香光。於此可見矣。

清の張士範、明の董其昌の書を輯む。鐫者は歙泉の黃潤章。每帖 標目の下に於て、均しく「菡亭士範」「蒲城張氏」の二印有り。第一卷は、楷書樂志論十三行の二種。皆な沈繹堂(荃 1624~84)、王夢樓(文治 1730~1802)の題有り。推挹すること甚だ至る。繹堂謂う、「唐人 褚の書は瑤台嬋娟の如しと評す。文敏(董其昌)諸帖を融化し、自然に歸す。法を用いて法に囿れず。此の四字は當に以て評を移すべし。」と。又た謂う、「松雪(趙孟頫)の書は勻靚にして優と為す。豐神四映、巧妙天成の如きは、文敏獨り擅にす。」と。夢樓其の評する所の允に当たるを歎じて、曰わく「香光(董其昌)は全く神韻を以て勝り、晉唐の諸家の大成を集む。余嘗て禪を以て喩うるを為す。晉人は如來禪なり。唐人は菩薩禪なり。宋人は祖師禪なりと。香光は兼ねて之れ有り。其れ少しく唐宋に遜るは、則ち時代の為す所。目撃して道存し、心手兩つながら忘るるに至る。恐らくは唐宋の諸家、未だ尽くは實証せず。元明に論無し。」と。第二卷は、尺牘數通。第三卷は、少陵(杜甫)の飲中八仙歌、典論(曹丕)の論文。第四卷は、七截(七絶)、五律の各詩を大書し、楊少師(凝式)の新步虚詞を臨す。自題に云う、「唐人の書は皆な迴腕。轉折は藏鋒。筆の往くを留め得て、直率流滑ならず。余未だ能くせざるを愧ず。迴腕藏鋒は、學書の要訣。筆能く留まるや否やに至りては、學者の功力を視わす。香光すら尚お流滑ならざるを以て難しと為す。其の境の未だ造り易からざるを知るべし。此の刻董書多く無きも、未だ贗筆有らず。小楷は摹勒尤も善し。明刻の各本に視ぶれば、啻に之に過ぐるのみならず。清代の書家の香光を尊崇するは、此ここに於て見るべし。

【注】

1 式好堂藏帖：『叢帖目3』式好堂藏帖4卷参照。

2 張士範：1730~93。蒲城の人。字は仲模。号は菡亭、澹園、式好堂。

3 黃潤章：『石刻刻工研究』にはその刻として嘉慶16年(1811)の「般若波羅密多心經」を載せる。

4 菡亭士範蒲城張氏二印：『中国書画家印鑑款識』に未収。

5 王夢樓題：『快雨堂題跋』卷5に「余嘗謂晉人書如如來禪也。唐人書為菩薩禪。宋人書祖師禪。……乾隆四十二年戊戌夏四月旬有一日。文石軒題。」とある。

(海老隆成)

【No.194】

香雪齋雁字迴文詩¹五卷² 鄂泉張氏本

清張玉德³作並書。道光元年⁴勒石。篆書二冊、隸行草各一冊。各冊每前一種。為篆隸行草。其回文一首。則皆用正書⁵。第一卷仿蒼帝古文。唐歐陽率更皇甫碑。第二卷仿周太史籀大篆、唐顏魯公多宝塔碑。第三卷仿漢曹景完碑。唐呂參軍景教碑。第四卷仿晉右軍聖教序。唐歐陽蘭台道因碑。第五卷仿晉王大令諸札。唐裴公美圭峰碑。每冊正回文冊首。以韻為次。其仿書之工。足与王虛舟千文等刻相抗。嘉慶時銅山拔貢王勉作雁字吟一百首⁶。一時傳誦。未有刊本。此則兼用回文体。組織益工。具見心思巧密。或以此等纖麗之作遠於大方。然積詩百數十首。典雅有法。回環讀之。莫不曲尽其妙。工於体物。

層出不窮。已非浅学可弁。所臨各家各体書。莫不酷肖其形。亦非有甚深之工力。未能造此境界。所謂文人遊戲。賢於博奕者乎。陝人多善刻石。摹搨精好。洵芸林之雅玩。藏者魯琪光⁷・楊守敬。鈕嘉蔭⁸均近代書家。於此刻深致賞愛。而不加菲薄⁹。蓋以詩字同臻精美。而用力之勤為可尚也夫。

清の張玉徳の作並びに書。道光元年(1821)の勒石。篆書二冊、隸行草各一冊。各冊は毎に前一種は、篆隸行草と為し、其の回文一首は、則ち皆な正書を用う。第一卷は蒼帝(倉頡)の古文、唐の歐陽率更(詢)の皇甫碑(皇甫誕碑)を仿う。第二卷は周(の宣王)の太史籀の大篆、唐の顔魯公(真卿)の多宝塔碑を仿う。第三卷は漢の曹景完碑(曹全碑)、唐の呂參軍(岳)の景教碑(景教流行中国碑)を仿う。第四卷は晋の右軍(王羲之)の聖教序(集王聖教序)、唐の歐陽蘭台(通)の道因碑(道因法師碑)を仿う。第五卷は晋の王大令(猷)の諸札、唐の裴公美(休)の圭峰碑(圭峯禪師碑)を仿う。冊毎に正回文卅首、韻を以て次を為す。其の仿書の工は、王虚舟(澍)の千文等の刻と相抗するに足る。嘉慶(1796~1820)の時 銅山の抜貢の王勉 雁字吟一百首を作り、一時伝誦せらるるも、未だ刊本有らず。此は則ち兼ねて回文体を用い、組織益ます工なり。具さに心思の巧密を見る。或いは以へらく此等の纖麗の作は大方に遠しと。然れども詩を積むこと百数十首。典雅にして法有り。回環して之を読めば、曲さに其の妙を尽さざるは莫し。体物に工にして、層出して窮まらず。已に浅学の弁ずべきに非ず。臨する所の各家各体の書は、酷だ其の形に肖ざるは莫く、亦た甚だ深きの工力有るに非ずんば、未だ能く此の境界に造る能わず。所謂 文人の遊戲の、博奕よりも賢なる者か。陝人 刻石を善くするもの多く、摹搨は精好、洵に芸林の雅玩。藏者の魯琪光、楊守敬(1839~1915)、鈕嘉蔭は均しく近代の書家、此の刻に於て深く賞愛を致し、而して菲薄を加えず、蓋し詩字同に精美に臻るを以て、力を用うることの勤 尚ぶべしと為すかな。

【注】

- 1 香雪齋雁字迴文詩：1979年、陝西省戸県工芸美術会社が拓出した冊装の『雁字迴文石刻』があり、景印本には台湾商務印書館、1990刊がある。
- 2 五卷：五卷は子冊から西冊の全十冊からなり、各冊首には「香雪齋雁字迴文詩 子冊 書仿唐李北海雲臺褚河南聖教序碑」のごとく題される。
- 3 張玉徳：生歿年不詳。字は比亭。西安府鄠県の人。
- 4 道光元年：「時道光元年歲次辛巳春正月、鄠県張玉徳作並書」の刻款がある。
- 5 各冊毎前一種為篆隸行草其回文一首則皆用正書：初めに篆書あるいは隸書あるいは行書あるいは草書による仿書で写した七律詩一首を、次いでその詩の迴文の七律詩一首を自運の楷書で写す形式で、各冊30首を収める。
- 6 王勉作雁字吟一百首：詳細不詳。
- 7 魯琪光：1828~98。字は芝友、号は戯珊、江西南豊の人
- 8 鈕嘉蔭：1857~1915。字は叔聞、号は聞叔。江蘇蘇州の人。
- 9 於此刻深致賞愛而不加菲薄：未検出

(李 松樺)

【No.195】

鴻濛室墨刻四卷 滇南方氏本

清方玉潤¹書。光緒庚寅刻成。玉潤字友石。曾官麟遊県知県。第一冊摹古器銘数十種。第二冊臨唐太宗 高宗 漢張芝 鍾繇 皇象 晋索靖 王虞 王羲之 猷之 梁蕭子雲 沈約 隋僧智果。第三冊臨唐褚遂良 顔真卿 宋蘇軾 米芾。第四冊自書心經西銘 馬嵬懷古詩 題独立図詩。有清一代。滇人以書著者。周立崖²。錢南園³。南園学平原。方勁有力。近人習顔書者多宗之。立崖晚年学米襄陽。作大行書。氣勢雄健。二賢皆足与中原書家相抗衡。友石之書未能比蹤周錢。而視僧湛福⁴為勝。其大書亦学南園。並能作四体書。此所摹鍾鼎文字不為兩頭尖形。異於俗派。然濃纖不一致。亦乖古体。积文題字多仿板橋。且過於肥重。非雅道所尚也。臨諸家帖用筆頗曲折。其合作有劉東武遺意。勝於所臨古篆。縮摹蘭亭尤見工力。自負有定武風規。与西園雅集圖記皆小書而具寬博之致。楷書心經筆筆謹嚴。全帖中此為全作。近代書家往往拘於院体。方氏固無摺卷

気習。然喜学板橋書。又未免鄰於鄙野。閱者舍短取長。分別觀之可也。

清の方玉潤の書、光緒庚寅(16年 1890)刻成。玉潤は字は友石、曾て麟遊県知事に官す。第一冊は古器銘數十種を摹す。第二冊は唐の太宗、高宗、漢の張芝、鍾繇、皇象、晋の索靖、王廙、王羲之、献之、梁の蕭子雲、沈約、隋の僧智果を臨す。第三冊は唐の褚遂良、顔真卿、宋の蘇軾、米芾を臨す。第四冊は自書の心経、西銘、馬嵬懷古詩、題独立図詩。有清一代、滇人の書を以て著るる者は、周立崖、銭南園なり。南園は平原(顔真卿)を学び、方勁にして力有り、近人の顔書を習う者は多く之を宗とす。立崖は晩年米襄陽(芾)を学び、大行書を作り、氣勢雄健。二賢は皆に中原の書家と相抗衡するに足る。友石の書は未だ周、銭に比躋する能わず、而れども僧湛福に視ぶれば勝ると為す。其の大書は亦た南園を学び、並びに能く四体書を作す。此れ鍾鼎を摹する所の文字は兩頭尖形を為さず、俗派に異なる。然れども濃纖一致せず、亦た古体に乖く。積文題字は多く板橋(鄭燮 1693~1765)に仿い、且つ肥重に過ぎ、雅道の尚ぶ所に非ざるなり。諸家を臨するの帖は用筆頗る曲折、其の合作は劉東武(壙 1719~1804)の遺意有り、臨する所の古篆に勝る。縮摹の蘭亭は最も工力を見る。定武の風規有りと自負し、西園雅集図記と皆に小書にして寛博の致を具う。楷書の心経は筆筆謹嚴、全帖中此れを全き作と為す。近代の書家は往往 院体に拘わる。方氏は固より摺巻の気習無し。然れども喜んで板橋の書を学び、又た未だ鄙野に鄰るを免れず。閱する者は短を捨て長を取り、分別して之を觀れば可なり。

[注]

- 1 方玉潤：1811~83。宝寧(雲南省広南県)の人。
- 2 周立崖：周於礼(1720~79)。字は綬遠、立崖は号。嶧峨(雲南省峨山彝族自治州)の人。
- 3 銭南園：銭澧(1740~95)。字は東注、南園は号。昆明の人。
- 4 湛福：生歿年不詳。字は介庵、昆明の人。

(齋藤 堯)

【No. 196】

小長蘆館集帖十二卷 慈谿嚴氏本

清嚴信厚輯。信厚。字小舫。工書精鑑。以家藏墨迹彙為此帖。光緒二十二年庚子¹刻成。元人書一冊。明三冊。清八冊。卷数不分次第。明清兩代之書所収多精品。惟元人書為遜。松雪書淵明事蹟。筆意淺薄。雖為天籟閣式古堂旧藏²。未可憑信。張雨。鮮于樞。俞和³。三家均非合作。此冊雖不存可也。各家皆有小伝。高崑。楊伯潤。何頌華。蒲華。吳農祥。金爾珍。張鳴珂。黄山壽。胡鏗。陸恢等分題其後。皆光緒間有書名於滬上者。覽其書則知其人。無事揀查之勞。甚於讀者為便。冊首小長蘆館集帖六字。陶濬宣題。陶。字心雲。工北体書。其名尤著。吳俊卿作後序⁴。謂其所刻尚有唐詩百首。皆集二王書。並其先代誥敕。小伝。墓誌。亦均以二王書集刻。双鈎上石者吳隱。葉銘。皆能深究金石之學。至謂此帖足与南唐之澄清堂⁵相匹。則過情之譽也。帖中書人時代多未分晰。或明清人共成一卷。疑以所得隨時入石。故有參差。乾嘉學人之書。全謝山最不易得。此収尺牘一通。署名為吾祖望。江南本有吾姓。此札文義平淺。絶非謝山所作。當是同名而異姓。小舫既未詳審而黄山壽即題謝山小伝於後。實謬誤之大者。不可不為更正也。

清の嚴信厚(1831~1902)の輯。信厚、字は小舫。書に工みにして鑑に精し。家藏の墨迹を以て彙めて此の帖を為る。光緒二十二年庚子 刻成。元人の書は一冊、明は三冊、清は八冊。卷数は次第を分けず。明清兩代の書の収むる所は精品多きも、惟だ元人の書のみ遜ると為す。松雪の淵明の事蹟を書するは、筆意は淺薄。天籟閣、式古堂の旧藏と為すと雖も、未だ憑りて信ずべからず。張雨、鮮于樞、俞和の三家は均しく合作に非ず。此の冊は存せずと雖も可なり。各家に皆な小伝有り。高崑(1850~1921)、楊伯潤(1837~1911)、何頌華(1858~1934)、蒲華(1830~1911)、吳農祥、金爾珍(1840~1917)、張鳴珂(1829~1908)、黄山壽(1855~1919)、胡鏗(1840~1910)、陸恢(1851~1920)等 分けて其の後に題す。皆な光緒間に書名を滬上に有する者なり。其の書を覽れば則ち其の人を知る。揀查の勞を事とする無く、讀者に於て便と為す。冊首の「小長蘆館集帖」の六字は、陶濬宣(1847~1915)の題なり。陶は字は心雲。北体書に工。其の名 尤も著わる。吳俊卿(昌碩) 後序を作り、「其の刻する所に尚お唐詩百首有り。皆な二王の書を集む。並びに其の先代の誥敕、小伝、墓誌も亦た

均しく二王の書を以て集刻す。双鉤上石する者は吳隱(石潜 1867~1922)、葉銘(品三 1867~1948)なり。皆な能く深く金石の学を究む。」と謂う。「此の帖は南唐の澄清堂と相匹するに足る」と謂うに至りては、則ち過情の誉なり。帖中の書人は時代多く未だ分晰せず。或いは明清の人 共に一卷を成す。疑うらくは得る所を以て隨時入石するが故に参差有るならん。乾嘉の学人の書は全謝山(祖望)最も得易からざるに、此れ尺牘一通を収む。署名は「吾祖望」と為す。江南には本より吾の姓有り。此の札は文義平浅なれば、絶えて謝山の作る所に非ず。当に是れ同名にして異姓なるべし。小舫 既に未だ詳審せず。而して黄山寿 即ち謝山の小伝を後に題す。実に謬誤の大なる者なり。更正を為さざるべからざるなり。

[注]

- 1 光緒二十二年庚子刻成：光緒 26 年(1900)の誤りか。
- 2 天籟閣式古堂旧蔵：天籟閣は項元汴(1525~86)の室号。式古堂は卞永譽の室号
- 3 張雨、鮮于樞、兪和：『叢帖目 2』小長蘆館集帖 12 卷には、張雨の爲宋晋題画詞、鮮于樞の題東坡枯木叢篠怪石図、兪和の題郭熙蜀山図のごとく、各人の作品名を併記する。
- 4 吳俊卿作後序：『叢帖目 2』所掲に、「先得集唐詩百首石刻、所欠六首、復集而補之。…又集三代誥敕及先德小伝墓志楹聯。皆二王書。…殆可与澄心堂齊驅並駕。…双鉤上石爲吳石潜隱、葉品三銘。皆能攷究金石之学者。因並志之。光緒癸卯(29 年 1903)春仲。」と見える。
- 5 南唐之澄清堂：吳昌碩後序には「澄心堂」とある。前注参照。

(小西優輝)

【No. 197】

東坡蘇公帖一卷¹ 旧石本

党文宝²模刻蘇書。無年月。疑在宋元間。帖四種。寄題与可學士洋州園池三十首。中山松醪賦²・伏臘。楚頌二帖。以一碑石分數層刻於兩面。明清間所刻蘇書多矣³、然或不分真偽、又摹勒多失筆意。此刻無偽迹。刀法深穩。非近代刻手所能。陳眉公重鐫於晚香堂。持校原本。非惟薄厚相懸。書則若出兩手。中山松醪賦。与洞庭春色賦合書一卷⁴。体多行書。有風馳雨驟之勢。此書真多於行。氣韻尤冲淡。洋州園池詩。用筆堅瘦。異他書之肥重。伏臘帖墨妙軒⁵亦有刻者。不及此本道厚。用筆曲折。悉爲伝出。如見墨跡。楚頌帖書法之美更出前數帖上矣。同一書跡。刻者不同則神理迥別。坡公豐碑巨碣。凡明人重刊俱失真相。大書尤爾。況於小字。此石爲宋与否固未能定。然決非明刻可以断言。今原石已多損泐。全文者不恒有。若得旧拓当与上清詞同宝貴矣。文宝一作文実。字画已泐。無旧本勘定。記此俟考。

党文宝 蘇書を模刻す。年月無し。疑うらくは宋元の間に在らん。帖は四種。題を与可學士(文同 1018~79)の洋州園池に寄する三十首、中山松醪賦、伏臘、楚頌の二帖。一碑石を以て數層に分ち兩面に刻す。明清の間 刻する所の蘇書は多し。然れども或いは真偽を分ちたず、又た摹勒 多く筆意を失う。此の刻は偽迹無し。刀法深穩、近代の刻手の能くする所に非ず。陳眉公(繼儒 1558~1639)は晚香堂に重鐫す。原本を持ち校ぶれば、惟だに薄厚相懸つるのみに非ず、書は則ち兩手に出づるが若し。中山松醪の賦、洞庭の春色に与うるの賦の合書一卷、体は行書多く、風馳雨驟の勢有り。此の書は真は行より多く、氣韻尤も冲淡。洋州の園池詩は、用筆堅瘦、他書の肥重なるに異なる。伏臘帖は墨妙軒も亦た刻する者あるも、此の本の道厚にして、用筆曲折、悉く伝出せられ、墨跡を見るが如きに及ばず。楚頌帖は書法之美、更に前の數帖の上に出ず。同一の書跡も、刻者同じからずんば、則ち神理は迥かに別。坡公の豐碑巨碣は、凡そ明人の重刊は俱に真相を失ひ、大書尤も爾り。況んや小字をや。此の石は宋と爲すや否やとは固より未だ定むる能わず。然るに決して明刻に非ざることは以て断言すべし。今は原石は已に損泐多く、全文は恒には有らず、若し旧拓を得ば当に上清詞と共に宝貴すべし。「文宝」は一は「文実」に作る。字画は已に泐し、旧本の勘定無し。此に記し考を俟つ。

[注]

- 1 東坡蘇公帖一卷：『叢帖目』に記載なし。
- 2 党文宝：『石刻刻工研究』に記載なし。

- 3 明清間所刻蘇書多矣：『叢帖目』には蘇軾の專帖として、東坡蘇公帖 6 卷、觀海堂蘇帖 1 卷附、東坡蘇公帖 3 卷附、雪浪齋蘇帖 4 卷、晚香堂蘇帖 35 卷、景蘇園帖 6 卷を収める。
- 4 中山松醪賦、与洞庭春色賦合書一卷：『三希堂法帖』第 11 冊に収録され、前半が「洞庭春色賦」、後半が「中山松醪賦」である。紹聖元年(1091)49 歳時、襄邑で書かれた。
- 5 墨妙軒：『叢帖目 2』の墨妙軒法帖 4 卷には「伏臘帖」の記載がない。

(海老隆成)

【No.198】

玉煙堂董帖四卷¹ 海寧陳氏本

明陳元瑞彙刻²董其昌書。元瑞有玉煙堂摹古法帖二十四卷³已著録。此則專刻董書。第一卷阿弥陀經。自叙。天台賦。洛神賦。第二卷月賦。舞鶴賦。西園雅集圖記。養生論。第三卷文賦。琵琶行。第四卷純陽真誥。臨米元章千字文。臨鍾元常二表。臨王逸少官奴帖。昔梁聞山謂⁴。董帖以清暉閣為第一。然其中皆行草。此刻多小楷。摹勒之精不減清暉。雖其自刻⁵及陳懿卜所刻諸種⁶皆遜此。陳香泉曰⁷。董書學顏學李學米皆未至。腕弱多敗筆。無一字能完備規矩。無一字不做得如美人柔媚。綽約可愛。顏書拳屈作古隸法。華亭但略得其拳屈而莫解其古意。九宮固華亭所素知。及行筆運動便要蹉跌。又云。華亭天資高妙。超絕群倫。求其矩度執使九宮分寸。往往落足失步。不復按轍而行。雖秀色動人。病處亦復不少。此華亭生平工力未到。難以強為。又云。董未嘗不從趙入。晚而毀趙。其詆華亭若代為吳興不平而為之報復者⁸。夫有香光之詣力。可以薄趙。香泉視董懸隔尚遠。而以一時之愛憎輕為謗議。殆同蚍蜉撼樹。於香光未曾有加損也。至謂文敏負絕世超軼之姿。加以數十年覽古博雅之功。含英咀華。開來繼往。為有明三百年之殿。又与前論如出兩人。香泉為元瑞後輩。因摘其語繫之陳氏刻帖之後。

明の陳元瑞 董其昌の書を彙刻す。元瑞に玉煙堂摹古法帖二十四卷有り已に著録す。此れは則ち専ら董書を刻す。第一卷は阿弥陀經、自叙、天台賦、洛神賦。第二卷は月賦、舞鶴賦、西園雅集圖記、養生論。第三卷は文賦、琵琶行。第四卷は純陽真誥、臨米元章千字文、臨鍾元常二表、臨王逸少官奴帖。昔 梁聞山(嶼 1710~85)謂う、「董帖は清暉閣を以て第一と為す。」と。然れども其の中は皆な行草。此の刻は小楷多し、摹勒の精なるは清暉に減ぜず、其の自刻及び陳懿卜 刻する所の諸種と雖も皆な此れに遜る。陳香泉(奕禧 1648~1709)曰く「董書は顔を学び李を学び米を学ぶも皆な未だ至らず、腕弱くして敗筆多く、一字として能く規矩を完備する無く、一字として美人の柔媚綽約の愛すべきが如きを做し得ざるは無し。顏書は拳屈 古の隸法を作す、華亭(董其昌)は但だ略ぼ其の拳屈を得れども其の古意を解する莫し。九宮は固より華亭の素より知る所、行筆の運動に及びては便ち要ず蹉跌す。」と。又た云う「華亭は天資高妙、群倫を超絶す。其の矩度の執使 九宮の分寸を求めて、往往 落足失歩し、復た轍を按じて行かず、秀色 人を動かすと雖も、病處は亦た復た少からず。此れは華亭の生平の工力未だ到らず、以て強いて為し難し。」と。又た云う「董は未だ嘗て趙従り入らずんばあらざるも、晩にして趙を毀る。」と。其の華亭を詆るは代わりて吳興の為に平らかならずして之が為に報復する者の若し。夫れ香光の詣力有り、以て趙を薄んずべし。香泉は董に視ぶれば懸隔尚お遠し、一時の愛憎を以て軽く謗議を為す、殆ど蚍蜉の樹を撼かすに同じ、香光に於ては未だ嘗て損を加うること有らざるなり。「文敏(董其昌)は絶世超軼の姿を負い、加うるに數十年 觀古博雅の功を以てし、英を含み華を咀み、來るを開き往を継ぎ、有明三百年の殿と為す。」と謂うに至りては、又た前論と兩人に出づるが如し。香泉は元瑞の後輩為り。因りて其の語を摘みて之を陳氏の刻帖の後に繋ぐ。

【注】

- 1 玉煙堂董帖四卷：『叢帖目 3』玉煙堂董帖 4 卷参照。張伯英『説帖』（『統修四庫提要』第 18 卷 292 頁）宝鼎齋帖 4 卷にも記載がある。
- 2 陳元瑞彙刻：陳璣(生歿年不詳)。字は季常、元瑞は号。『叢帖目』には「海寧陳元瑞編次。上海吳朗摹刻。」とある。
- 3 玉煙堂摹古法帖二十四卷：『叢帖目 1』玉煙堂帖 24 卷参照。張伯英『説帖』には玉煙堂法帖 24 卷（『統修四庫提要』第 18 卷 252 頁）の他に、渤海藏真 8 卷(同書 265 頁)、安素軒石刻 20 卷(274 頁)、因宜堂法帖 8 卷(304 頁)、二王帖選 2

卷(305頁)、平遠山房法帖6卷(298頁)、潑墨齋法帖10卷(293頁)に記載があり、『法帖提要』にはNo.61 寒碧山莊二王帖3巻、No.108 鄧文原急就章1巻、No.109 程氏瘞鶴銘、No.128 香光集帖4巻、No.162 述德堂小楷集刻4巻、No.192 話山草堂帖8巻、No.334 玉芝園法帖4巻、No.344 宋三家宝刻12巻、No.345 橋隱園趙帖5巻、No.366 海寧陳氏石刻4巻に記載がある。

- 4 昔梁聞山謂董帖以清暉閣為第一：『承晉齋積聞録』「古今法帖論」に「清暉閣乃是董思翁刻帖第一種。」とある。
- 5 自刻：増田知之「董其昌の法帖刊行事業に見る權威確立への構想」(『史林』91巻5号、2008年、史学研究会)に詳しい。
- 6 陳懿卜所刻諸種：劍合齋帖6巻をはじめ、鶴鶴館帖4巻、紅綬軒法帖4巻、延清堂帖6巻等がある。『叢帖目3』参照。陳懿卜は陳鉅昌(生歿年不詳)。懿卜は字。江蘇省蘇州の人。
- 7 陳香泉曰…又曰…又曰…至謂…：『綠陰亭集』には「華亭天資高妙。可以超絶群倫。求其矩度執使。九宮分寸。往往落足失步。不復按轍而行。……雖秀色動人。病處亦復不少。此華亭生平工力未到。難以強為也。……董文敏負絶世超軼之姿。又加之以數十年覽古博雅之功。含英咀華。開來繼往。為有明三百年之殿。……韭花逞味。晝寢乍興……思翁書自韭花外。學顔學米學李。得力於三家為多。初未嘗不從趙入。晚而毀趙。吾不與也。韭花用力為深。若顔米李。學而未至焉。董學米。亦得手。但其腕弱。姿態則過之。極多敗筆。無一字能完備規矩者。無一字不做得如美人柔媚綽約可愛。顔書拳屈。作古隸法。華亭但略得其拳屈。而莫解其古意。九宮固華亭素知者。及行筆運動。便要蹉跌。」とある。傍点部分が文の異同箇所。
- 8 其詆華亭若代為吳興不平而為之報復者：余紹宋『書畫書録解題』の『綠陰亭集』の項に「其論董文敏書、時有貶抑、而香泉書法實出於文敏、亦猶米襄陽書出於李北海而時詆北海、董文敏書出於趙松雪而時詆松雪、文人相輕、古今如一轍。」とある。董其昌は『容台別集』巻4「題跋」に「若臨倣歷代。趙得其十一。吾得其十七。又趙書因熟得俗態。吾書因生得秀色。趙書無弗作意。吾書往往率意。當吾作意。」という。

(池田絵理香)

【No.199】

書譜二巻 天津安氏本

清安岐刻。岐字儀周。朝鮮人。寄居天津。富於資財。有鑑別之識。天下名書畫多歸之。著有墨緣彙觀一書行世。得唐孫過庭書譜墨迹。屬陳香泉為作積文¹。刊成二巻。書譜自宋時已無全本。其序存而譜亡。過庭既善書。故於書學之甘苦得失剖析入微。唐人論書之作。惟寶泉述書賦²。可與抗衡。寶賦詳於古今書人。此則詳於學書門徑。更足津逮後學。且為自作草書。論者以為優入晉人之室。唐賢遺墨罕與倫比。宋時石刻。有河東薛氏本。太清樓本³。太清樓本。世已希有。薛本雖有伝者。亦疑非宋人原石。明則停雲館本⁴甚著。自安刻出而加於其上。所附香泉積文。亦有裨於學者。過庭伝書。惟此及所臨十七帖。至墨妙軒所刻千文⁵景福殿賦⁶。皆與過庭無涉。文中惟詆毀子敬⁷。乃沿襲俗説之謬誤。子敬為右軍少子。右軍沒時。子敬方十七歲。寧得有密拭父書之事⁸。此説既誣。則自謂勝父之語⁹不弁自明。過庭以是評隲二王優劣。殊為全書之玷。包慎伯刪而去之¹⁰。良不為過。至寶泉謂其一字萬同。則同時相輕。語難憑信。習草書者究其議論。玩其體勢。由是上窺晉人不致迷於趨向。今通行多覆刻。安氏原本。日亡日少。得其初搨。幾與宋帖比重矣。

清の安岐(1683~?)の刻。岐は字は儀周、朝鮮の人。天津に寄居し、資財に富み、鑑別の識有り、天下の名書画多く之に歸す。著に墨緣彙觀の一書有り世に行わる。唐の孫過庭(648?~703以前)の書譜の墨迹(垂拱3年687)を得て、陳香泉(奕禧1648~1709)に屬して積文を作るを為さしめ、二巻を刊成す。書譜は宋時より已に全本無く、其の序存して譜亡し。過庭は既に書を善くす。故に書學の甘苦得失に於て剖析 微に入る。唐人の論書之作は惟だ寶泉の述書賦のみ抗衡に与るべし。寶賦は古今の書人に詳しく、此は則ち學書の門徑に詳しく、更に後學を津逮するに足り、且つ自作の草書と為す。論者以て優に晉人の室に入ると為す。唐賢の遺墨は倫比に与るもの罕れなり。宋の時の石刻に河東の薛氏本、太清樓本有り。太清樓本は世已に有ること希なり。薛本は伝わる者有りと雖も、亦た疑うらくは宋人の原石に非ず。明は則ち停雲館

本甚だ著わる。安刻出でてより其の上に加う。附する所の香泉の積文も、亦た学に裨する者有り。過庭の伝書は、惟だ此れ及び臨する所の十七帖のみ。墨妙軒の刻する所の千文、景福殿賦に至りては、皆な過庭と渉る無し。文中惟だ子敬を詆毀するは、乃ち俗説の謬誤を沿襲す。子敬は右軍の少子為り、右軍没する時、子敬は方に十七歳、寧ぞ密かに父の書を拭うの事有るを得ん。此の説既に誣なれば、則ち自ら父に勝ると謂うの語は弁せずして自ら明らかなり。過庭是を以て二王の優劣を評隲するは、殊に全書の玷と為す。包慎伯(世臣)刪りて之を去るは、良に過ちと為さず。寶泉の其れ一字万同と謂うに至りては、則ち同時の相軽ずるものにして、語憑信し難し。草書を習う者其の議論を究め、其の体勢を玩す。是れ由り上は晋人を窺い迷を趨向に致さず。今通行に覆刻多し。安氏の原本は日に亡び日に少く。其の初搨を得れば、幾ど宋帖と重きを比す。

[注]

- 1 作積文：安氏本に行書で付された。錢泳の翻刻では陳穉によって小楷で付される。
- 2 寶泉述書賦：寶泉は生歿年不詳。字は靈長。扶風(陝西省麟游県)の人。2巻。大暦4年(769)撰。弟の寶蒙が同10年に注を加えた。
- 3 薛氏本太清樓本：薛氏本の「元祐二年河東薛氏模刻」の款記は偽款で、明代の江陰曹驥本と一系であることが、啓功氏によって明らかにされている。太清樓本(宋拓)は殘欠本ながら、真蹟本に欠ける後半三行三十字分のうちの十六字がある。
- 4 停雲館本：『停雲館帖』(嘉靖16~39年)卷三所収
- 5 千文：『墨妙軒法帖』本は孫過庭の書と伝える草書千字文のひとつ。張伯英は王升の書というが、容庚は避諱から張説を否定する。草書千字文にはほかにも『余清齋帖』所刻本ほか幾本かがある。
- 6 景福殿賦：魏の何晏の賦を草書で写したものの。『墨妙軒法帖』所刻は内府収蔵の墨本によったもの。孫過庭の書と伝えるが偽跡。他に『戲鴻堂帖』所刻の零本もある。
- 7 詆毀子敬：書譜にいう「以子敬之豪翰、殆右軍之筆札、雖復粗伝楷則、実恐未克箕裘。況乃假託神仙、恥崇家範。」
- 8 密拭父書之事：書譜にいう「羲之往都、臨行題壁。子敬密拭除之、輒書易其処、私為不惡。」この話は李嗣真(?~696)『書後品』に見える。
- 9 自謂勝父之語：虞蘇『論書表』に見える逸話。『書譜』に「(謝)安嘗問(子)敬、卿書何如右軍。答云、故当勝。」と見える。
- 10 包慎伯刪而去之：『安吳論書』所収「刪定吳郡書譜序」

(李 松樞)

【No.200】

御書法帖十二卷¹ 清内府本

清聖祖賜翰詹諸臣御書。康熙四十年張英韓奕等彙摹入石。後有進帖表文云。康熙三十九年六月。命召翰詹諸臣於暢春園澹寧居。擬皇太后万寿無疆賦。欽定甲乙。隨於次日恩賜御書各一幅²。諸臣肅拜祇頌。欽忭不自勝。恭摹上石。用垂万万世。謹以恩賜翰詹諸臣御書。並恩賜由翰林升轉各衙門諸臣御書。摹刻法帖共十二卷。表後具鈎刻人姓名。每帖之下。附注賜某官臣某。被賜約及百人。所書多臨米臨董。臨董者頗肖。臨米則未能似。聖祖學董書工力甚深。其中合作即置之華亭書中。幾於無弁。一時廷臣如沈繹堂輩。莫不宗法華亭。御書碑版。由繹堂代筆者。曾屢見之³。聖祖自書。行草為多。若真書則不恒有也。際承平之世。享國最久。物阜民康。天下無事。万幾余暇。怡情翰墨。觀書跡之豐腴。猶想見其人之福沢。歷代帝王之富貴壽考。罕与為儷。此本康熙四十一年翰林院檢討阿金⁴所藏。題記出陳香泉手。阿金字鶴亭。嗜香泉書。故香泉為代筆題字。氈蠟之美。光生几案。良可珍也。

清の聖祖(康熙帝 在位 1661~1722)の翰詹の諸臣に賜りたるの御書、康熙四十年(1701)張英(1637~1708)、韓奕(1637~1704)等彙摹入石す。後に進帖の表の文有りて云う、「康熙三十九年(1700)六月 命じて翰詹の諸臣を召し、暢春園の澹寧

居に於て皇太后(孝惠章皇后 1641~1718)万寿無疆の賦を擬せしめ、甲乙を欽定し、随て次日に於て御書各おの一幅を恩賜す、諸臣 肅拜祇領し、欽忭して自ら勝えず、恭摹上石し、用て万万世に垂れん。」と。謹んで翰詹の諸臣に恩賜せし御書、並びに翰林由り各衙門に升転したる諸臣に恩賜せし御書を以て法帖を摹刻す、共に十二卷。表後には鈎刻人の姓名を具にす。每帖の下に附して某官臣某に賜るを注す、賜はるは約ぼ百人に及ぶ。書する所は米(芾)を臨し董(其昌)を臨する多し。董を臨する者は頗る肖るも、米を臨するは則ち未だ似る能わず。聖祖 董書を学び工力甚だ深し、其の中の合作は即ち之を華亭(董其昌)の書中に置くとも弁ずる無きに幾し。一時の廷臣 沈繹堂(荃 1624~84)の輩の如きは、華亭を宗法とせざるは莫し、御書の碑版は繹堂の代筆に由る者曾て屢しば之を見る。聖祖の自書は行草多しと為す。真書の若きは則ち恒には有らざるなり。承平の世に際し、享国最も久し。物阜く民康し、天下無事にして、万幾の余暇、情を翰墨に怡ばす。書跡の豊腴を觀れば、猶お其の人の福沢、歴代帝王の富貴寿考の、与に儷を為すこと罕なるを想見するがごとし。此の本は康熙四十一年(1702)翰林院檢討 阿金の藏する所、題記は陳香泉(奕禧 1648~1709)の手に出づ。阿金は字は鶴亭、香泉の書を嗜む、故に香泉 為に代筆して字を題す。氈蠟の美、光 几案に生ず。良に珍とすべきなり。

【注】

- 1 御書法帖十二卷：康熙帝の御書を集刻した法帖としては他に「懋勤殿法帖二十四冊」(康熙 29 年)「懋勤殿法帖八冊」(康熙 38 年)「淵鑿齋御筆法帖十冊」(康熙 33 年)「避暑山莊御筆法帖五冊」(康熙 55 年)が『石渠寶笈統編』第 72 に収録。懋勤殿法帖兩者にはそれぞれ順治帝の御書も含まれる。
- 2 康熙三十九年六月……恩賜御書各一幅：『清史稿』『聖祖仁皇帝實錄』に相当する記述無し。ただし、『清史稿』卷 7、本紀七、聖祖本紀二には「(康熙 39 年)冬十月辛酉、皇太后六旬万寿節、上製万寿無疆賦、親書圍屏進獻。」とある。また、同書卷 214、列伝 1、孝惠章皇后列伝には「(康熙)三十九年十月、太后六十万寿、上製万寿無疆賦、……以獻。」とある。『聖祖仁皇帝實錄』卷 201 にも同内容の記述がある。
- 3 御書碑版由繹堂代筆者曾屢見之：陳康祺(1840~90)の『郎潜紀聞三筆』卷 9 には「沈文恪公荃久值南書房、聖祖數召入內殿、賜坐、論古今書法、凡御製碑版及殿廷屏障、輒命公書之。」とある。
- 4 阿金：生歿年不詳。滿州鑲白旗の人。康熙 30 年の進士。『清代館選分韻彙編』卷 10 では、字は雲挙とする。

(齋藤 堯)

【No. 201】

四宜堂法帖八卷¹ 清内府本

清世宗御書。乾隆元年十月二十四日旨真摹勒上石。第一卷觀農論²、墨龍潭碑文、硃批諭旨序、訓戒武巨論、喜雨詩、愛蓮說。第二卷惜穀論、庭訓格言序、大清律例集解序³、古今圖書集成序、朋黨論。第三卷柏梁詩序、唐羅鄴水簾詩、駢字類編序、律曆淵源序、音韻闡微序、戒遊閑論、明石沆觀稻詩。第四卷十思疏、子史精華序。第五卷御書匾額題詞上。第六卷御書匾額題詞下、御製詩、金趙溈詩。第七卷御製闕里孔廟碑文。第八卷御選語錄總序、僧肇序、永嘉序、寒山捨得序、滄仰序、趙州序、雲門序、永明序、紫陽序、雪竇序、円悟序、玉琳瑯⁴溪序、自序⁵、蓮池序、歴代禪師前集序、歴代禪師後集序。帖之首尾及每段標題皆八分書、御書則大小真行俱備、皆平平正正、不矜奇立異、其合作正不減陳奕禧、汪由敦也。金趙溈、明石沆二詩均大行草、尤見筆力。乾隆内拓之帖色黝如漆、其光可鑑、須上墨四次方能濃艶若此。今之工人罕得其法、且亦無此等佳墨、一枝之微、每況愈下、讀之不禁舉然於國家全盛時矣。

清の世宗(雍正帝 在位 1723~35)の御書。乾隆元年(1736)十月二十四日旨を奉じて摹勒上石す。第一卷は觀農論、墨龍潭碑文、硃批諭旨序、訓戒武巨論、喜雨詩、愛蓮說。第二卷は惜穀論、庭訓格言序、大清律例集解序、古今圖書集成序、朋黨論。第三卷は柏梁詩序、唐の羅鄴水簾詩、駢字類編序、律曆淵源序、音韻闡微序、戒遊閑論、明の石沆(溈仲：生歿年不詳)の觀稻詩。第四卷は十思疏、子史精華序。第五卷は御書匾額題詞上。第六卷は御書匾額題詞下、御製詩、金の趙溈(文孺：生歿年不詳)の詩。第七卷は御製闕里孔廟碑文。第八卷は御選の語錄總序、僧肇の序、永嘉の序、寒山捨得の序、滄仰の序、趙州の序、雲門の序、永明の序、紫陽の序、雪竇の序、円悟の序、玉琳外耳瑯溪の序、自序、蓮池の序、歴代禪

師前集序、歴代禪師後集序。帖の首尾及び毎段の標題は皆な八分書、御書は則ち大小真行俱に備わり、皆な平平正正、其の合作は正に陳奕禧(1648～1709)、汪由敦(1692～1758)に減ぜず、金の趙溈、明の石沆の二詩は均しく大行草、最も筆力を見る。乾隆の内拓の帖は色は黝きこと漆の如く、其の光は鑑らすべし。上墨すること四次を須てして方に能く濃艶なること此の若し。今の工人 其の法を得ること罕なり、且つ亦た此等の佳墨無し。一枝の微、毎況愈いよ下る。之を読めば国家の全盛の時に畢然たるを禁ぜず。

〔注〕

- 1 四宜堂法帖八卷：『叢帖目4』巻19に収録。No.258『郎吟閣法帖』にも見え、その提要に「顧帖中之書実視四宜堂為遜」と説く。『石渠宝笈統編』に著録。
- 2 觀農論：『叢帖目4』には「胤禛觀農論」とあり。
- 3 大清律例集解序：『叢帖目4』では「庭訓格言序」の後に「聖鑰廣薰序」がある。ここは誤脱か。
- 4 苜：『叢帖目4』は「苜」につくる。
- 5 自序：『叢帖目4』には「旨序」とある。

(小西優輝)

【No. 202】

致遠堂法書一卷¹ 沁州張氏本

清張孝捏²得陶淵明自書詩刻為此帖。孝捏。字雋次。自跋云靖節人品學問。晉代第一。從未有稱其書者。辛酉³余得雜詩十二種古勁流逸。墨跡宛然。每展玩不忍釋手。因思物之美者。不可秘而弗傳。與傳之不廣且久。況物以人重。世不經見。如靖節手沢耶。爰訪名工。鑄之貞石。淵明書不見於述書賦。宋刻晉帖。無其一字。是唐宋人皆不曾見。若墨跡猶存。連篇累牘。雖連城寧足比重。不惟陶也。題者⁴袁昂。沈約。馮道根。徐勉。陳霸先。章燦皆。唐以前。惟沈約書⁵淳化法帖有三行之札。行筆古健。而不盡可識。自宋以來積文數十家⁶。均有未合。其他並無隻字留遺。此則或數行。或數字。粲然滿目。而唐武后御題。及狄仁傑。姚元之諸名賢。時代較近。更不足異矣。夫晉賢之書不為唐宋人所見而今乃復出。可斷以必無其事。況晉人氣韻高簡。安得貼東海。祝枝山之俗狀。擾其筆端似此直屬笑柄。張以翰院中人。其識竟如是淺鄙。摹勒為帙。精搨傳播。謂覺羲皇上人。去今不遠。此書去今誠不遠。奈去五柳先生遠何。揭其偽以告世人。得者作清代草書觀之可也。

清の張孝捏 陶淵明の自書詩を得て刻して此の帖を為る。孝捏は、字は雋次。自跋に云う、「靖節(陶淵明 365～427)は人品學問晉代第一。從(じゅうらい)未だ其の書を稱うる者有らず。辛酉 余 雜詩十二種を得。古勁流逸。墨跡宛然たり。展玩する毎に手を積くに忍びず。因りて物の美しき者は、秘して伝えざるべからざると、之を伝えて広く且つ久しからざるとを思う。況んや物は人を以て重ぜらるるに、世の經見せざること、靖節の手沢の如きをや。爰に名工を訪ね、之を貞石に鑄す。」と。淵明の書は述書賦に見えず。宋刻の晉帖に其の一字無し。是れ唐宋人皆な曾て見ず。若し墨跡猶お存せば、連篇累牘、連城と雖も寧ぞ重きを比ぶるに足らん。惟だに陶のみならざるなり。題する者は袁昂、沈約、馮道根、徐勉、陳霸先、章燦、皆な唐以前。惟だ沈約の書のみは淳化法帖に其の三行の札有り。行筆は古健なれども尽くは識るべからず。宋より以來の積文の數十家、均しく未だ合わざる有り。其の他 並びに隻字の留遺無し。此れは則ち或いは數行。或いは數字。粲然として目に滿つ。而して唐の武後の御題及び狄仁傑、姚元之の諸名賢は、時代較や近し。更めて異とするに足らず。夫れ晉賢の書 唐宋人の見る所と為らずして今乃ち復た出づるは、斷じて以て必ず其の事無かるべし。況んや晉人の氣韻の高簡、安んぞ張東海(弼 1425～87)、祝枝山(允明 1460～1526)の俗狀を得ん。其の筆端を擾すこと此くの似くなれば、直ちに笑柄に屬す。張は翰院中の人なるを以てして、其の識 竟に是くの如く淺鄙。摹勒して帙を為し、精搨傳播す。羲皇上人、今を去ること遠からずと覺ゆと、謂う。此の書 今を去ること誠に遠からず。五柳先生を去ることの遠きを奈何せん。其の偽を掲げて以て世人に告げ、得る者は清代の草書と作して之を見れば可なり。

〔注〕

- 1 致遠堂法書一卷：9石からなる。末尾にある張跋の款に「乾隆七年歲次壬戌十月二十三日山西沁州後学張孝捏敬跋」とある。現在は武則天記念館にある。
- 2 張孝捏：1693～？。沁州(山東省沁県)の人。乾隆元年(1736)の進士。
- 3 辛酉：乾隆元年の前後の辛酉は康熙20年(1681)と乾隆6年(1741)であり、生年が康熙32年(1693)であることから、乾隆6年、張孝捏48歳と考えられる。
- 4 題者：9石中には馮道根と章燦の跋文は見られない。逆に崔玄暉、蘇道、張循憲、郭元振、韋嗣立らの觀款、王十朋の跋文が見られる。
- 5 沈約書：『淳化閣帖』巻4所収の「今年帖」を指す。
- 6 自宋以来积文数十家：主なものに黄伯思の『東觀余論』、顧從義の『法帖积文考異』、王澐の『淳化秘閣法帖考正』などがある。

(海老隆成)

【No.203】

移晴堂書課十卷¹ 新建曹氏本

清曹秀先書。乾隆癸酉秋。其弟觀光輯刻為十卷。秀先字冰持。号地山。乾隆乙卯²薦舉博学鴻詞。丙辰進士。改庶吉士。以已入詞館不與試。官至礼部尚書。諡文恪。著有賜書堂集。此帖第一二卷。皆書孔子家語。第三卷。羊叔子讓開府表。伝咸陳世俗奢侈書。山濤啓事。何充薦虞喜疏。鮑昭飛白書勢。陶弘景答謝中書書。吳均与宗元思与施從事与顧章三書。第四卷。鶴山題跋。東坡題跋。第五卷。山谷題跋。止齋題跋。却掃編。桐陽偶述。第六卷。韓昌黎。陸放翁詩。第七卷。蘇子瞻承天夜遊。第八卷。蘇魏公題跋。第九卷。歐陽公學士院題名跋。第十卷。朱晦翁二程子像贊。地山書名甚著。沈著似張得天。而遜其宕逸。樸厚近劉石庵。而遜其靈警。由天資不逮二家。当与汪謹堂³周立厓⁴相伯仲也。為江南學政時。題徐州試院四教堂額⁵。字徑尺許。氣雄筆健。具左顧右盼之勢。帖中所収書。皆不之及。同為一人一時所書。得失乃有甚懸殊者。因知過庭乖合之論⁶有至理矣。

清の曹秀先(1708～84)の書。乾隆癸酉(18年 1753)の秋、其の弟 觀光 輯刻して十卷を為す。秀先は字は冰持、号は地山。乾隆乙卯(すなわち雍正13年 1735)博学鴻詞に薦舉せらる、丙辰(乾隆元年 1736)の進士、庶吉士に改めらる。已に詞館に入るを以て試に与らず。官は礼部尚書に至る。諡は文恪。著に『賜書堂集』有り。此の帖の第一、二卷は皆な孔子家語を書す。第三卷は羊叔子讓開府表、伝咸陳世俗奢侈書、山濤啓事、何充薦虞喜疏、鮑昭飛白書勢、陶弘景答謝中書書、吳均与宗元思与施從事与顧章三書。第四卷は鶴山題跋、東坡題跋。第五卷は山谷題跋、止齋題跋、却掃編、桐陽偶述。第六卷は韓昌黎、陸放翁詩。第七卷は蘇子瞻承天夜遊。第八卷は蘇魏公題跋。第九卷は歐陽公學士院題名跋。第十卷は朱晦翁二程子像贊。地山は書名甚だ著る、沈著は張得天(照 1691～1745)に似れども其の宕逸を遜る、樸厚は劉石庵(墉 1720～1804)に近きも其の靈警を遜る。天資 二家に逮ばざるに由りて、当に汪謹堂、周立厓と相い伯仲すべきなり。江南の學政為りし時、徐州試院四教堂の額を題す。字は徑尺許り、氣雄筆健、左顧右盼の勢を具う。帖中に収むる所の書は、皆な之に及ばず。同じく一人の一時に書する所と為るに、得失 乃ち甚だ懸殊の者有り、因りて過庭の乖合の論に至理有るを知る。

[注]

- 1 移晴堂書課十卷：『叢帖目』に収録しない。「移」字は、No.55 智恩堂書課1巻には「有移晴齋帖已著録」とあるが、李元度『国朝先正事略』の曹文恪公秀先の項には「尤工書法。上嘗召問平日究心字学。因進所刻敬恩堂移晴堂書課。蒙賞御臨黃庭堅尺牘二幅。」とある。なお所見の墨蹟「移晴堂書課」及びその印記「移晴」によれば「移」である。
- 2 乾隆乙卯：『国朝先正事略』に「雍正…十三年(乙卯 1735)考取内閣中書。詔開博学鴻詞科。臨川以公名列薦。乾隆元年(丙辰 1736)成進士」とあり、『昭代名人尺牘小伝』には「雍正…乙卯(13年 1735)薦舉鴻博。乾隆丙辰(元年 1736)進士。」とあることから、この乙卯は雍正13年(1735)を指す。

- 3 汪謹堂：王由敦(1692～1758)。字は師茗、謹堂は号。安徽省休寧の人。雍正2(1724)年の進士で、吏部尚書に至った。專帖に乾隆帝の勅命によって刻成された『時晴齋法帖』がある。
- 4 周立厓：周於礼(1720～79)。字は綏園、立厓は号。雲南省峨山の人。乾隆16(1751)の進士で、大理少卿に至った。『聽雨樓帖』を撰集した。
- 5 四教堂額：前掲のNo.55 智恩堂書課1巻に「曾書四教堂三大字於徐州孔子廟。筆力勁拔而左規右矩。不糸毫放縱而意態自足。……」とある。
- 6 過庭乖合之論：孫過庭『書譜』に「又一時而書。有乖有合。…略言其由。各有其五。…乖合之際。優劣互差。」とある。

(池田絵理香)

【No.204】

詒晋齋摹古帖十卷¹ 成邸本

清成親王永理輯。成邸自書亦名詒晋齋帖²。此其所藏墨跡。嘉慶乙丑模勒上石。晋則陸機平復帖。唐則懷素苦筍帖。宋則高宗 蘇子由 黄山谷 米元章 米友仁 朱元晦 趙子固 周南 文文山 僧北磻。元則趙子昂 康里子山 鮮于伯幾 白玉蟾 趙仲光。明則吳王朱長源。卷数不分次第。每卷或一帖。或三四帖。皆真蹟。未有贗者。惟黃庭經二種。乃是一人所書。其一有子昂款。其一系列宋帝王書中。審其筆致。非出松雪。疑明代人所為。尤非宋也。嘉道間刻帖之風頗盛。如粵之潘氏伍氏等。多与此刻同時。然皆徒侈卷帙之富。真贗在所不計³。成邸勢位既崇。收藏亦多。是帖所刻只廿余種。由其鑑別之識。遠出時流以上。不惟其多惟其真。刻帖者宜取法也。晋唐遺墨流傳日少。宋人所輯已不能無誤。況又在數百年後。以成邸深嗜篤好。具有收藏之大力。所得僅平復。苦筍二帖。近代收藏家高談魏晉。動盈篋筍。実与古人渺不相涉。而勒石伝世貽誤後学。雖名家不免此弊。二帖氣韻高古。灼然可信。宋元諸家。選擇亦慎。袁治⁴鈎摹。頗稱精善。視其他刻本為勝。卷首詒晋齋帖四篆字。乃成邸自書也。

清の成親王永理(1752～1823)の輯。成邸の自書も亦た詒晋齋帖と名づく。これは其の蔵する所の墨跡。嘉慶乙丑(10年1805)模勒上石す。晋は則ち陸機の平復帖、唐は則ち懷素の苦筍帖、宋は則ち高宗、蘇子由(轍)、黄山谷(庭堅)、米元章(芾)、米友仁、朱元晦(熹)、趙子固(孟堅)、周南、文文山(天祥)、僧北磻(居簡)、元は則ち趙子昂(孟頫)、康里子山(夔夔)、鮮于伯幾(枢)、白玉蟾、趙仲光(奕)、明は則ち吳王朱長源(允燭)。卷数は次第を分けず。卷毎に或いは一帖、或いは三四帖。皆な真蹟、未だ贗なる者有らず。惟だ黃庭經二種のみは、乃ち是れ一人の書する所、其の一は子昂の款有り、其の一は宋の帝王の書中に列す。其の筆致を審らかにするに、松雪(趙孟頫)に出づるに非ず、疑うらくは明代の人の為る所、尤も宋には非ざるなり。嘉(慶)、道(光)の間 刻帖の風頗る盛んなり、粵の潘氏、伍氏等の如きは、多く此の刻と時を同じくす。然れども皆な徒だ卷帙の富めるを侈るのみにして、真贗は計らざる所に在り。成邸は勢位 既に崇く、收藏も亦た多し、是の帖の刻する所は只だ廿余種のみなるも、其の鑑別之識は、遠く時流以上に出づるによる。其の多きを惟わず其の真なるを惟う、帖を刻する者は宜しく法を取るべきなり。晋唐の遺墨の流傳は日に少なし、宋人の輯する所已に誤り無き能わず、況や又た數百年後に在るをや。成邸の深く嗜み篤く好み、收藏の大力を具有するを以てして、得る所は僅かに平復、苦筍の二帖のみ。近代の收藏家 魏晉を高談し、動もすれば篋筍に盈たすも、実と古人と渺かに相渉らずして、石に勒し伝世し誤りを後学に貽る、名家と雖も此の弊を免れず。二帖は氣韻高古、灼然として信ずべし。宋元の諸家は、選擇も亦た慎む。袁治の鈎摹は、頗る精善を称せらる、其の他の刻本に視ぶれば勝ると為す。卷首の詒晋齋帖の四篆字は、乃ち成邸の自書なり。

[注]

- 1 詒晋齋摹古帖十卷：『叢帖目』に記載無し。『四部總錄芸術編』には「版式高大、異於自書之詒晋齋帖。」とある。『集古求真』卷13にも同様の記述がある。
- 2 成邸自書亦名詒晋齋帖：『法帖提要』にNo.230 詒晋齋巾箱帖16巻、『説帖』にNo.79 詒晋齋法書16巻を収める。また、『叢帖目4』に詒晋齋書5巻(嘉慶9年)、詒晋齋巾箱帖4巻(嘉慶12年)、詒晋齋集錦帖4巻(嘉慶16年)、詒晋齋藏真

帖4卷(嘉慶17年)、詒晉齋藏帖4卷(嘉慶17年)、詒晉齋巾箱統帖4卷(嘉慶13年)、詒晉齋法書16卷(嘉慶24年)を収める。

3 如粵之潘氏伍氏等……在所不計：潘氏は潘仕成(1804~73)。『法帖提要』にNo.398 尺素遺芬4卷、『説帖』にNo.s59 海山仙館摹古帖12卷とNo.s60 海山仙館藏真帖正統32卷を収める。伍氏は伍元蕙(1824~65)。『法帖提要』にNo.146 激觀閣樞古帖3卷、『説帖』にNo.s55 南雪齋藏真12卷を収める。この時期に広東で刊行されたこれら法帖について、張伯英は『説帖』No.s64 嶽雪樓鑒真法帖12巻で「粵之富人往往喜聚書面刻為叢帖、如海山仙館、南雪齋、寒香館(『説帖』No.s19 寒香館藏真帖6巻)之類、雖卷數多寡不同、款式大略相似。然選採都不甚精、筠清館帖(『説帖』No.s9 筠清館法帖6巻)之外、無不真偽雜糅、豐於財者拙於目、造物盈虛之理固如是耶。」と評している。

4 袁治：No.189 南韻齋帖4巻の注1を参照。

(齋藤 堯)

【No. 205】

紫藤花館藏帖四卷¹ 吳江徐氏本

清徐山民²輯。皆朋好投贈之書。故無偽蹟。山民為徐虹亭³從孫。曾刻虹亭本事詩及楊誠齋集⁴。又曾重葺徐侯裔遺民祠宇。亦乾嘉間學人之好事者。第一卷劉文清 法時帆 王西沚 袁簡齋。第二卷梁山舟 王夢樓 趙甌北 余秋室 陸桂舟。第三卷吳穀人 顧耕石 阮文達 伊墨卿 洪稚存 唐陶山 方容齋。第四卷顧蔚雲 陸小雲 爰湘湄⁵ 尤二娛 魏霞城 高頗愚 陸鶴臞。共計有三家。有嘉慶十八年日本熊坂秀沐岡部中保梅谷十時⁶順三家題跋。梅谷云。昔宋神宗時。我國有皇子善所書。墨蹟流入中華。蘇東坡文忠公及當時諸賢士大夫。俱有題識。今中華辭翰。題於我國。竊愧僻所海裔。忝為儒官。得列名於大邦人物之末。有附驥尾之辛。語至謙光。其石同治間歸南林周昌富⁷。光緒間又歸烏程劉錦藻⁸。各有題記。嗟嗟今何時世觀此帖者能無世運盛衰之感也乎。

清の徐山民の輯。皆な朋好投贈の書。故に偽蹟無し。山民は徐虹亭の從孫為り。曾て虹亭の本事詩及び楊誠齋集を刻す。又た曾て徐侯裔遺民の祠宇を重葺す。亦た乾嘉間の學人の好事者なり。第一卷は劉文清(壩)、法時帆(式善)、王西沚(鳴盛)、袁簡齋(枚)。第二卷は梁山舟(同書)、王夢樓(文治)、趙甌北(翼)、余秋室(集)、陸桂舟(未詳)。第三卷は吳穀人(錫麒)、顧耕石(元熙)、阮文達(元)、伊墨卿(秉綬)、洪稚存(亮吉)、唐陶山(仲冕)、方容齋(振)。第四卷は顧蔚雲(汝敬)、陸小雲(応宿)、爰湘湄(棠)、尤二娛(維熊)、魏霞城(標)、高頗愚(慶)、陸鶴臞。共に廿有三家。嘉慶十八年(1813)の日本の熊坂秀沐、岡部中保、梅谷十時順 三家の題跋有り。梅谷云う「昔 宋の神宗(在位 1067~85)の時、我が国に皇子の善く書する有り。墨蹟中華に流入し、蘇東坡文忠公及び當時の諸賢士大夫、俱に題識有り。今は中華の辭翰もて、我が国に於て題す。竊かに僻所の海裔たるを愧ず。忝く儒官と為り、名を大邦の人物の末に列するを得て、驥尾に附するの幸い有り。」と。語は至りて謙光。其の石は同治の間 南林の周昌富に歸し、光緒の間 又た烏程の劉錦藻に歸す。各おの題記有り。嗟嗟今何時の時にして此の帖を観る者 能く世運盛衰の感無からんや。

〔注〕

- 1 紫藤花館藏帖四卷：『叢帖目3』参照。
- 2 徐山民：徐達源。字は無際。山民は号。
- 3 徐虹亭：徐軌(1636~1708)。詩人。字は電発、虹亭は号。吳江(今の蘇州)の人。
- 4 楊誠齋集：楊万里(1127~1206)の詩集。
- 5 爰湘湄：『叢帖目3』には袁棠とあり。爰は袁の誤写か。
- 6 梅谷十時：十時梅谷。江戸後期の儒者。十時梅厓の養子。本姓は山田、名は順、字は伯祐、号は梅谷樵夫。
- 7 周昌富：1839~95。字は鶴峰、号は芸齋、国子監生。湖州南潯の人。
- 8 劉錦藻：1862~1934。名は安江、字は澂如、号は橙墅、堅匏盒。浙江吳興(今の湖州)南潯鎮の人。

(小西優輝)

【No. 206】

甌香館法帖四卷¹ 句容馮氏本

清惲壽平²書。句容馮宜瑜³摹刻。宜瑜有慕義堂梁帖⁴已著録。此刻無年月題識。惟外籤各有慕義堂印馮氏模勒二印。嘉慶七年。新安王曰旦愛石山房⁵。曾刻惲帖六卷。錢竹初⁶。錢野余⁷二人為之審定。毛湘渠⁸模勒。此四卷悉與相同。其為王氏所刻石歸於馮氏。抑馮氏依王本重鑄。則莫可考。其書臨古一卷。題画二卷。尺牘一卷。王刻尺牘頗多。然亦有重複者。今傳僅馮本。而王刻不恒有矣。南田初名格。後以字行。其書鎔鑄楮。黃。米為一家。而書名則為画所掩。生平以画自隱。不曾為仕。明季學者。以清人入主中國多懷種族之痛。南田之生較晚。幼遭離亂。時平而後亦不試。其題画柳詩有「於今天地屬誰家」⁸之句。可推知其旨趣。與笄江上⁹、王石谷¹⁰為莫逆。江上官至侍御史。石谷亦曾供奉內廷。南田則心憔悴終身。晚年無子。太倉友人為之納妾。所舉子亦復不育。見王刻尺牘中。而此本則未之有。由是以觀。其人蓋能隱居求志者。豈容僅以画人目之歟。

清の惲壽平の書。句容の馮宜瑜の摹刻。宜瑜に慕義堂梁帖有り、已に著録す。此の刻 年月題識無し。惟だ外籤に各おの「慕義堂印」「馮氏模勒」の二印有り。嘉慶七年(1802)に新安の王曰旦 愛石山房に、曾て惲帖六卷を刻す。錢竹初、錢野余の二人 之が為に審定す。毛湘渠の模勒。此の四卷 悉く與に相い同じ。其れ王氏の刻する所の石は馮氏に歸すと為すか、抑そも馮氏 王本に依り重鑄するか、則ち考うべき莫し。其の書は臨古一卷。題画二卷。尺牘一卷。王 尺牘を刻すること頗る多し。然ども亦た重複する者有り。今伝わるは僅かに馮本のみにして、王刻は恒には有らず。南田は初名は格。後 字を以て行わる。其の書は楮、黄、米を鎔鑄して一家を為す。而して書名は則ち画の掩う所と為る。生平 画を以て自から隠れ、曾て仕うるを為さず。明季の学ぶ者、清人入りて中國に主たるを以て種族の痛みを懐くもの多し。南田の生まるるは較や晚く、幼くして離亂に遭う。時平らにして後も亦た試に應ぜず。其の画柳に題するの詩に「今に於て天地誰が家に属さん」の句有り。推して其の旨趣を知るべし。笄江上、王石谷と莫逆為り。江上は官は侍御史に至り、石谷も亦た曾て内廷に供奉たり。南田 則ち憔悴して身を終う。晚年 子無し。太倉の友人 之が為に妾を納るるも、挙ぐる所の子も亦た復た育たず。王刻の尺牘中に見ゆるも、此の本は則ち未だ之れ有らず。是に由りて以て觀れば、其の人 蓋し能く隱居して志を求むる者なり。豈に僅かに画人を以て之を目すべけんや。

【注】

- 1 甌香館法帖四卷：『叢帖目3』のほか、No. 219 明清人名尺牘10巻にも見える。
- 2 惲壽平：1633～90。常州(江蘇省武進)の人。南田は号。後に正叔と字した。
- 3 馮宜瑜：No. 190 慕義堂梁帖8巻の注2を参照。金陵の人。
- 4 慕義堂梁帖：No. 190 慕義堂梁帖8巻の注1を参照。
- 5 惲帖六卷：『叢帖目3』には愛石山房1巻とあるが、「杭州金耐田。旧交也。嘗甌香館帖伝世。此帖予与錢竹初、野余兩先生於真蹟中挾其尤者鉤勒上石。独恨耐田已歸道山。不得持以相證為可嘆歎也。曰旦同日記。」とあり、この惲帖6巻と同じと考えられる。張伯英所見本は、のちに増刊され6巻になったものであろう。
- 6 錢竹初：1739～1806。名は維喬。字は季木、樹參。竹初は号。武進の人。
- 7 錢野余：1738～1812。は伯炯、伯炯。字は魯思、魯斯。野余は号。陽湖の人。
- 8 於今天地属誰家：『甌香館集』所収詩には見えない。
- 9 笄江上：1623～92。名は重光。字は在莘。江上外史は号。江蘇省丹徒の人。
- 10 王石谷：1632～1717。名は翬。石谷は字。号は耕煙散人など。江蘇省常熟の人。

(海老隆成)